

新平溪煤礦博物園區（台湾炭鉱博物館）と友好館協定を締結

石川 孝織*

当館と田川市石炭・歴史博物館（福岡県／筑豊炭田：以下「田川市博」）は、2007（平成20）年頃から企画展の共同開催をはじめとする交流を続けてきました。また、田川市博は新平溪煤礦博物園區（台湾炭鉱博物館）との交流を推進しており、そのご縁で筆者も訪台するなどしてきました。

同園區は台北市中心部から自動車でも45分ほど、新北市平溪区の旧炭鉱（ただし鉱業権は現在も保持）を利用した博物館で、「独眼小僧」との愛称がある鉱山用機関車の動態保存でも知られています。

田川市博と新平溪煤礦博物園區は2016（平成28）年に友好館協定を締結しており、2019（令和元）年、炭鉱研究者の集まりである「全国石炭産業関連博物館等研修交流会（全炭博研）」第9回大会が釧路で開催された際、同園區の龔俊逸館長らが釧路市長を訪問し、そこで当館との友好館協定の締結についても示されました。しかし、その直後からのコロナ禍による海外渡航制限により、締結ができなままとなっていました。このたび、海外渡航条件が緩和されたことから、市長を代表とする訪問団として、観光プロモーションや花蓮市（2022年8月友好交流協定締結）、台北市立動物園（釧路市動物園と友好園）などの訪問とともに、2023（令和5）年1月11日、同園區にて締結式を開催しました。国内外問わず、当館初の「友好館協定」となります。



署名後の記念写真

（左から村嶋部長、蝦名市長、龔館長、李常務次長、饒處長）

式典には、台湾から龔館長・簡嘉宏副館長、台湾政府文化部の李連權常務次長、東北角・宜蘭海岸国家風景区の馬惠達處長、新北市府秘書局の饒慶鈺處長、日本台湾交流協会新聞文化部の村嶋郁代部長、国立雲林科技大学の王新衡助理教授、中華民国鉄道文化協会の許乃懿監事など、釧路市から市長、市議会議員、教育長、生涯学習部長など、また釧路日台親善協会（小船内修一会長）、釧路市議会日台友好促進議員連盟（畑中優周会長）が出席しました。

式典では市長と龔館長による協定書への署名の後、主催者や来賓のスピーチ、記念パーティが行われました。

ここに、龔館長のスピーチ内容を要約して掲載します。

新平溪煤礦（炭鉱）は父が1985年に台陽鉱業会社から買収したもので、1997年に採掘を休止した。2000年には台湾の炭鉱は全て生産を中止している。父は炭鉱を博物館にして台湾の炭鉱文化を保存したいと考え、もと炭鉱マンたちと少しずつ整備を進めたが、その過程は非常に困難があった。私が引き継いだ後は、田川市博、釧路市立博物館など日本との交流を開始した。

日本は明治維新後に産業を近代化し、国を強くした。1895年の下関条約締結後、台湾は多くの技術を吸収・応用し、第二次世界大戦後にはわずか数十年で「台湾経済の奇跡」を生み出した。台湾の石炭採掘の歴史は日本と非常に似ている。国内エネルギー資源が極端に少ない中で、炭鉱はかつて両国において重要な役割を果たした。近代化への貢献とその物語は、忘れてはならない。

私たちは新北市政府と共同で「国際希望都市」と呼ばれる地域活性化計画を進めている。「炭鉱から文化観光産業へ」という移行を釧路市立博物館と一緒に模索している現在の姿は、100年前の木村久太郎と台陽鉱業会社が協力した歴史と重なる。幸運と祝福を象徴する平溪のランタン、富と吉祥を象徴する釧路のタンチョウは、幸福感と安定感をもたらしてくれる。不安定な状況にある国際社会において、このような前向きなエネルギーが一層必要だ。両博物館のパートナーシップが、台湾と日本の友好交流に寄与することを願う。

太平洋炭礦（1920年設立）の初代社長「木村久太郎」は台湾で財をなした実業家であり、また同社設立時には台湾5大家族（財閥）だった「基隆顔家」も大きく関わっています。さらに戦前期、筑豊（三井田川炭業所）で活躍した技術者が、台湾と釧路（太平洋炭礦）の炭鉱近代化に尽くしたなど、釧路・田川・台湾は100年以上前から石炭を通じた交流があり、今回の友好館協定を3館・3地域のさらなる友好・交流発展に繋げたいと考えています。

現在、同園區では「日本北海道釧路の煤礦－前世今生」展が開催中です。当館では今年7月に、同園區と台湾の炭鉱を紹介する展示を計画しています。

最後になりましたが、協定締結に協力いただいた皆様、特に終始サポートいただいた田川市石炭・歴史博物館の福本寛学芸員、また3館の交流促進へ支援をいただいていた西日本新聞社元 台北支局長（現 大牟田支局長）の佐伯浩之氏に御礼を申し上げます。

*釧路市立博物館